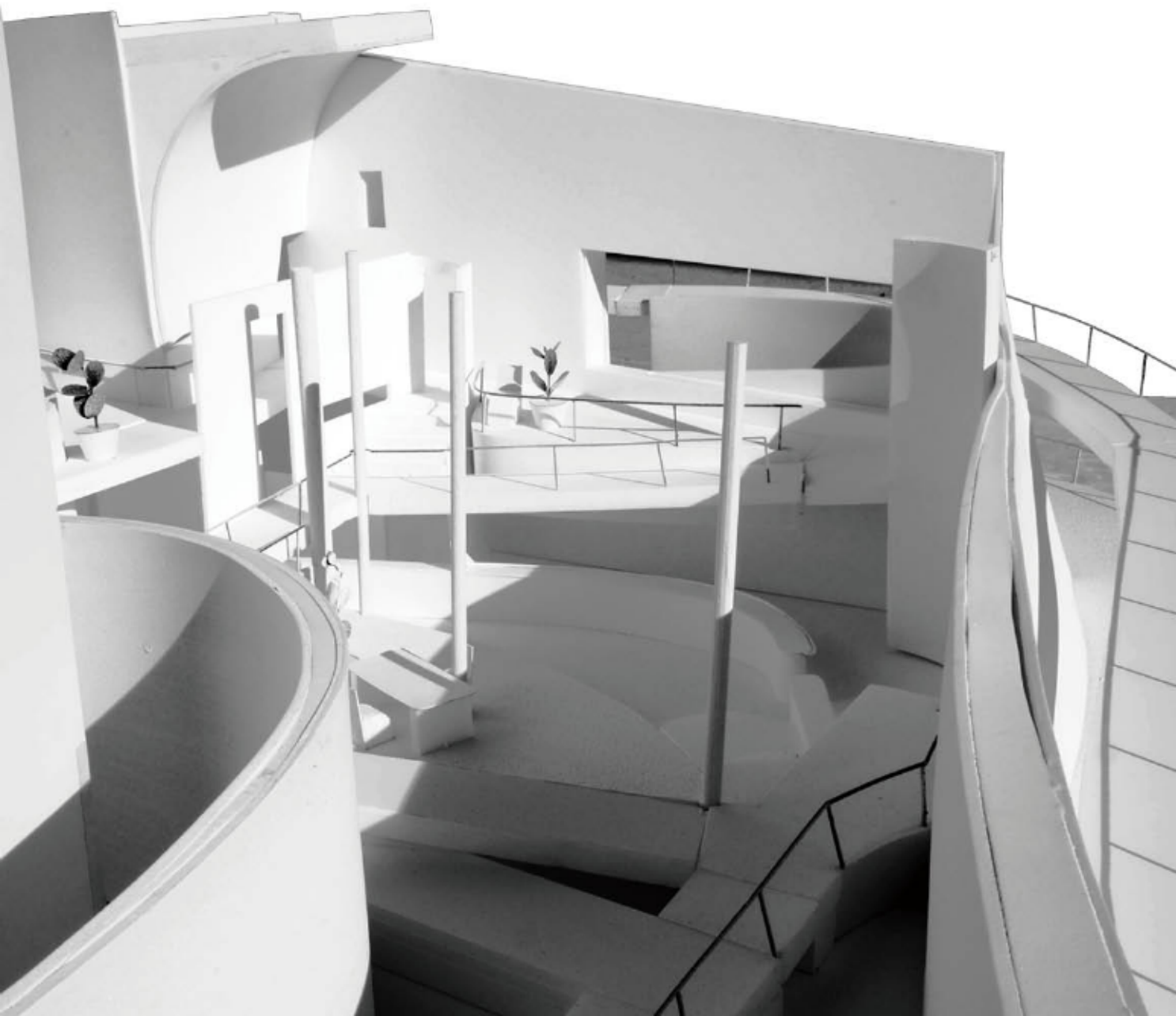


〈すみだまり〉の展望台

ー《The Peacock Skirt》の体験的リサーチと再構成をととして

早稲田大学 芸術学研究所 芝原由香

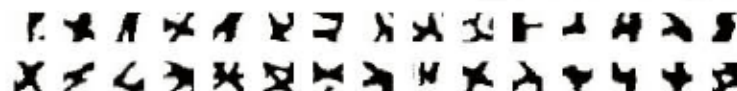


1. 帯の制約と〈すみだまり〉

1-1. ピアズリーと印刷

ピアズリーは、19C末ロンドンの挿絵作家である。
産業革命により本の印刷が普及し、紙の端に「印刷可能な最小太さ」が定義されたことで、帯の制約に初めて直面した画家でもある。
彼は繊細な線を追求する中で、ドローイングにおける線が
“幅をもった帯でもある”と捉え直し、独自のインクの跡を定着させた。
この印刷という制約に対処する跡を〈すみだまり〉と定義する。

《The Peacock Skirt》
A. Henry Beauchamp
2004



△《The Peacock Skirt》の〈すみだまり〉の一例

1-2. 展望台と質量

21C東京、隅田川と小名木川の交点にある敷地も、当時のピアズリーと同じく“線の太さの制約”に直面している。
展望台の建て替え計画では、

①高さ4mの堤防、②それ以上の高さで見晴らす展望台と、③そこへの動線、④貸し倉庫室が求められている。
これらの要件は川や橋の境界線、動線、手の軌跡など、様々な線を敷地に納めることでもある。



2. 〈すみだまり〉の由来

2-1. 《The Peacock Skirt》の〈すみだまり〉発生原理

インクの加筆的ディテール〈すみだまり〉を収録し、それが生まれた経緯を推察しながら分類する。

①本の制型という絶対的な範囲に納めること
②印刷によって表現できない線を徹底的に排除する必要があったこと
ピアズリーは上段2点への意識があったという仮定のもと、
彼の代表作《The Peacock Skirt》の〈すみだまり〉パターンは以下の3種類に大別される。

i) 線自体に質量を持たせる ii) 紙の白を浮か上らせる iii) 全体のバランスをとる



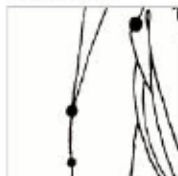
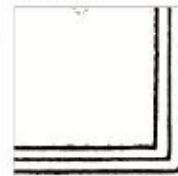
線の外側のエッジを強調



黒元の空隙をくり出す

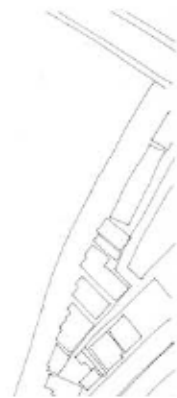


黒線移動と開閉のしるし

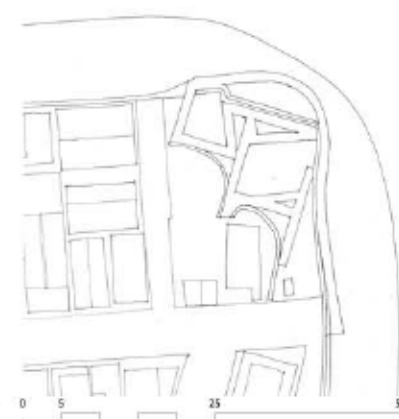




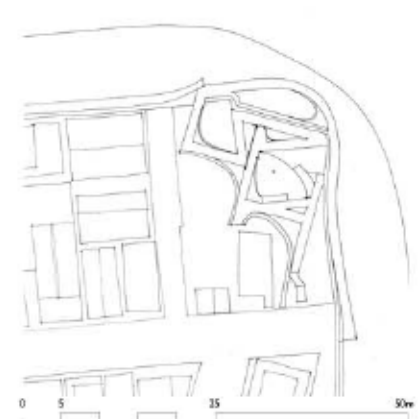
①川の交点の形状を考える



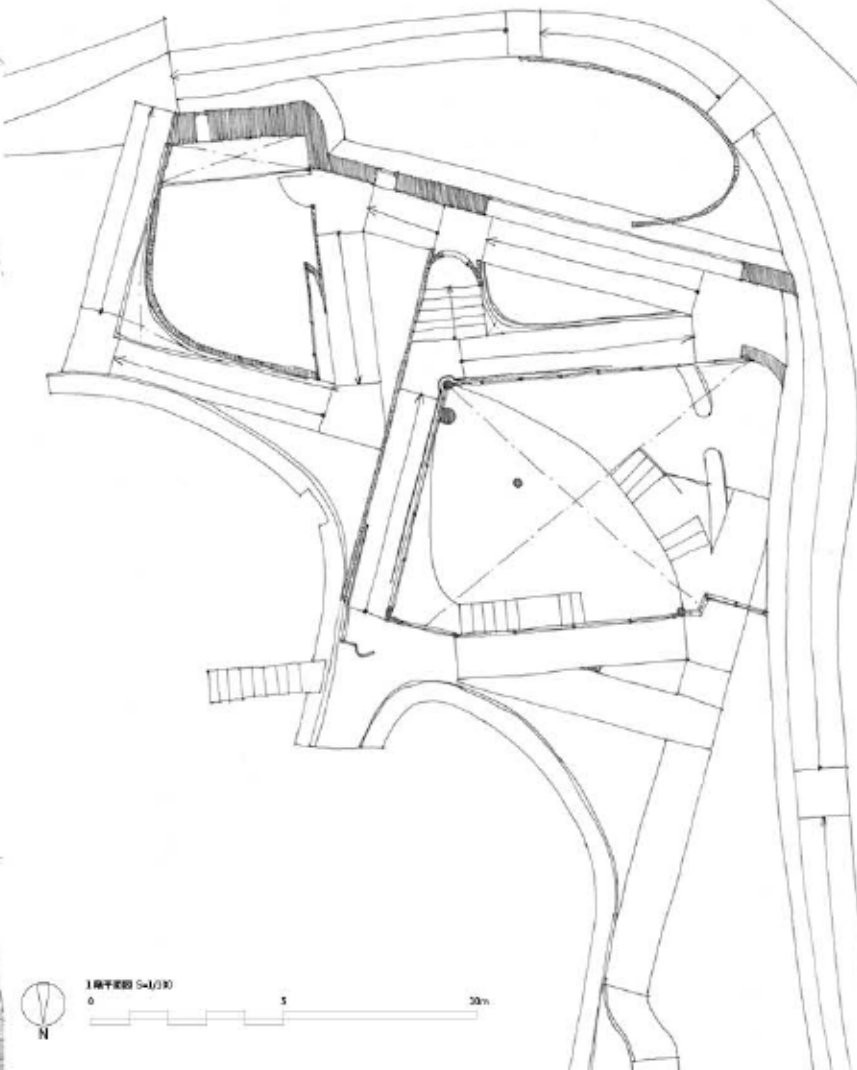
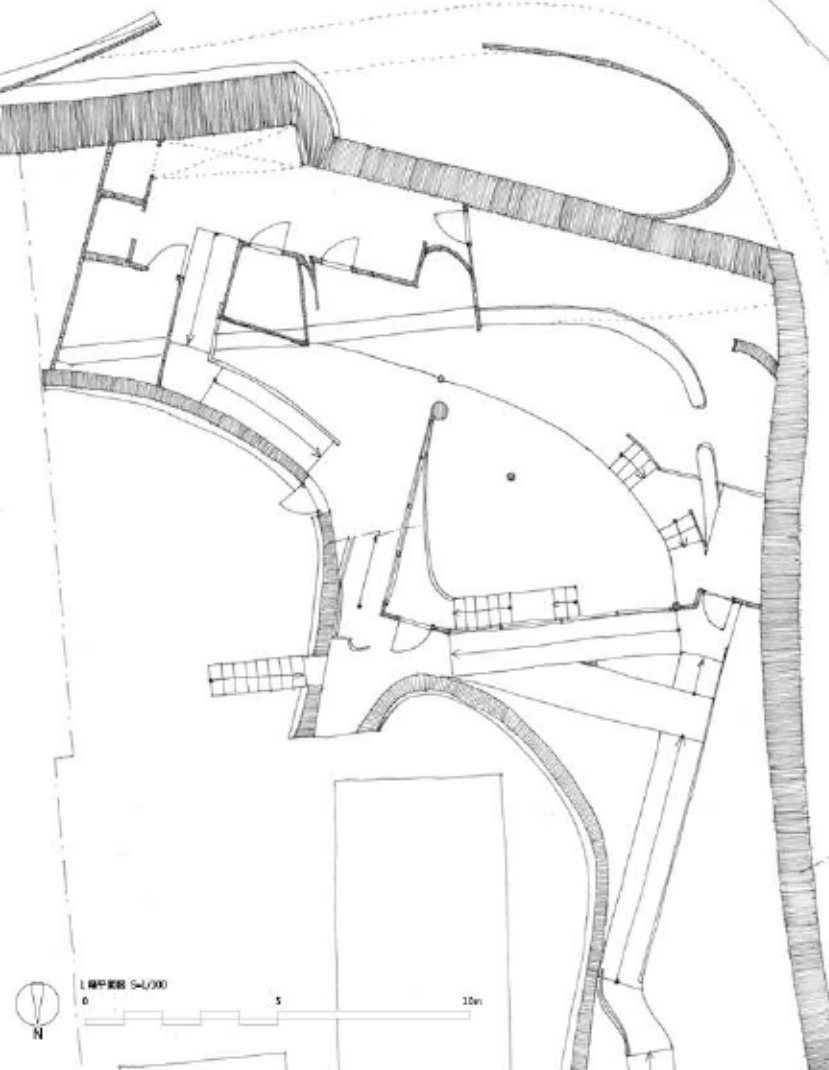
②橋を入れ込む（今回の最大長：1/12勾配スロープ、約50m）



③橋に太さを与え導にする（幅：35mm-1200mm）



④緑地帯を設計する



3. 設計

3-1. 「すみだまり」の体験的拡張

ex. 1) すみだまりへ入り込む

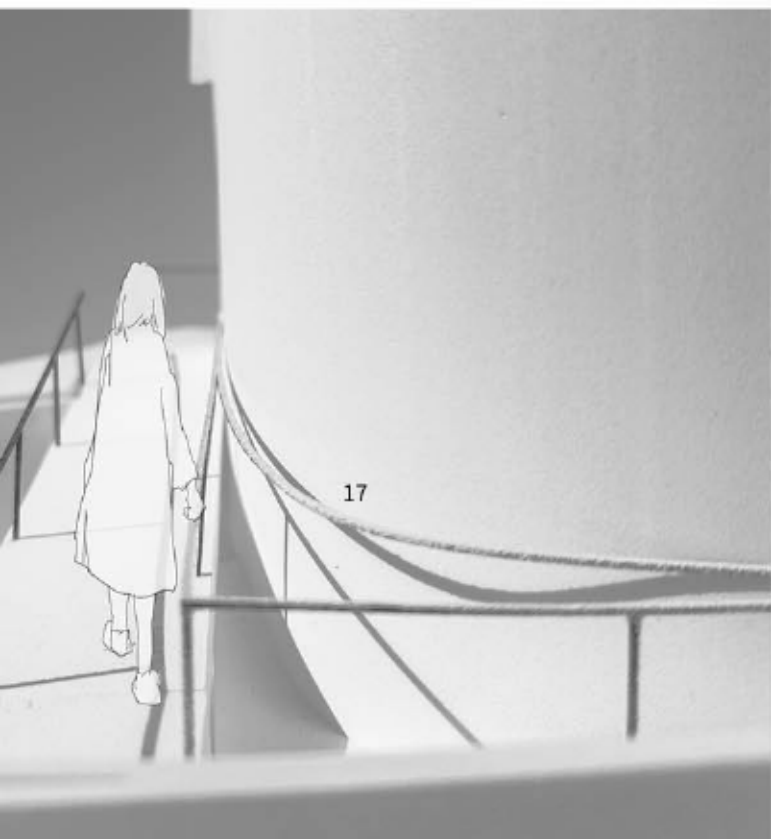
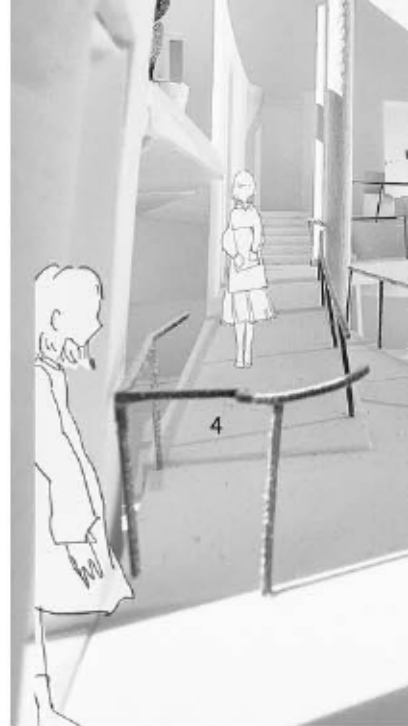
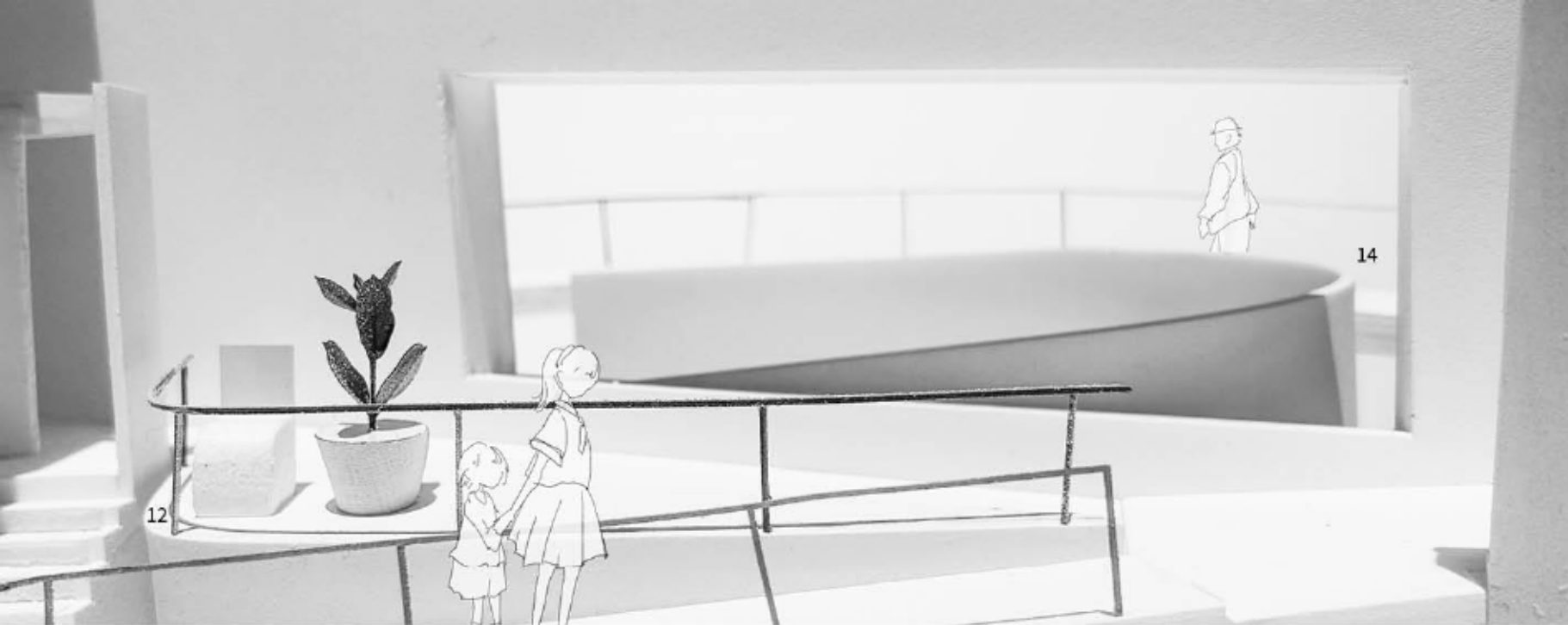


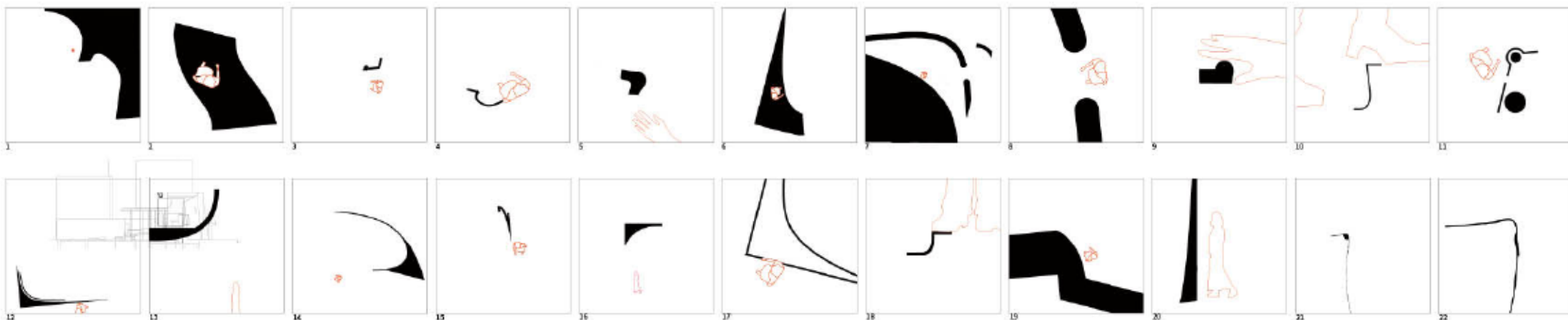
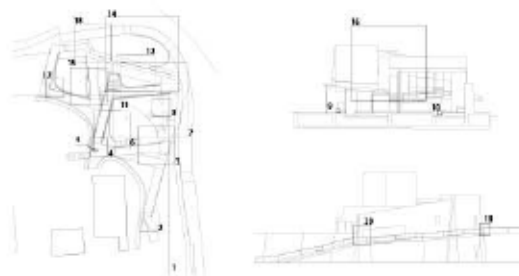
ex. 2) 線を軌跡と捉える



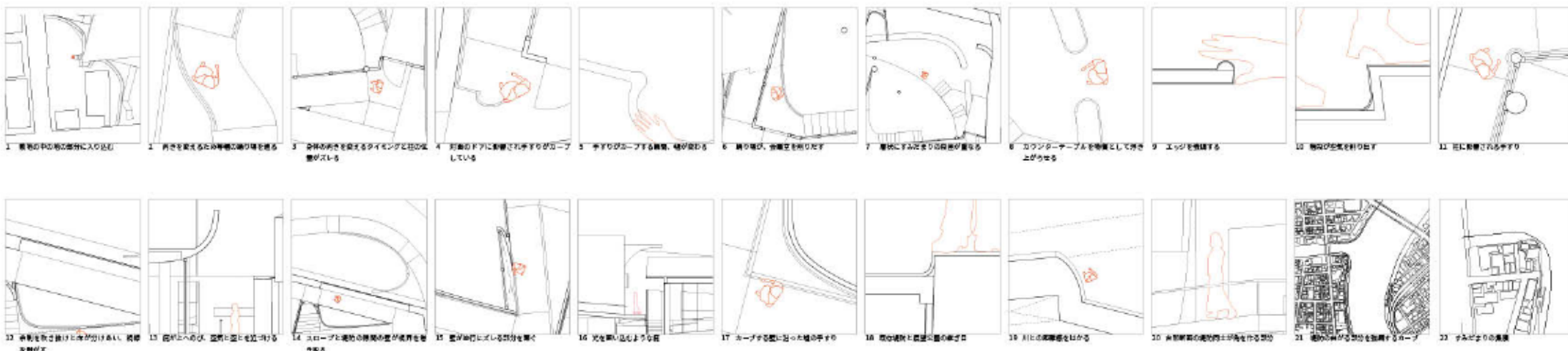
ex. 3) 図形を眺める







陸側～川側へ、堤防を乗り越える〈すみだまり〉シークエンス, 抽象
S=1/2000, 1/5000, 1/500, 1/200, 1/100, 1/50, 1/20, 1/10, 1/5



陸側～川側へ、堤防を乗り越える〈すみだまり〉シークエンス
S=1/2000, 1/5000, 1/500, 1/200, 1/100, 1/50, 1/20, 1/10, 1/5